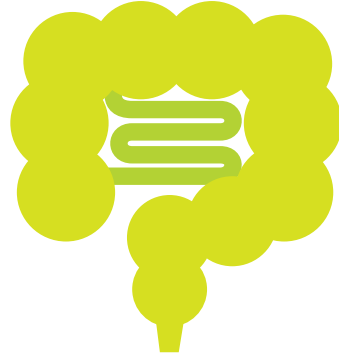


患者さんの 生活の質の向上を求めて 最適なIBD治療を目指す



IBDは、英語の「Inflammatory Bowel Disease」の頭文字で、「炎症性腸疾患」のことを指します。腸に炎症を生じさせる病気には難治性のものが多く、代表的な病気として「潰瘍（かいう）性大腸炎」と「クローン病」の2つがあります。

潰瘍性大腸炎

大腸の粘膜に炎症が起こり、下痢や血便、腹痛といった症状が慢性的に続きます。炎症が悪化・長期化すると、合併症を起こすこともあります。日本では指定難病の中で患者数が最も多く、世界でも米国に次いで2位の患者数になっています。

クローン病

「クローン」という病名は、この病気を米国で初めて報告した医師の名前に由来します。口から肛門まで消化管全体に炎症が生じる可能性がありますが、主に小腸や大腸、肛門に慢性的な炎症が見られます。腹痛と下痢が多くの患者さんに見られる症状です。

IBDの患者さんの数は 増加しています



もともと欧米で多く見られた病気ですが、日本でもこの30～40年で患者さんの数が大幅に増えました。発症する年齢は20～30代と若いことが多いものの、潰瘍性大腸炎については近年は高齢になってからの発症も顕著に増加しています。はっきりとした原因が明らかになっておらず難病に指定されていますが、遺伝的な要因、食事や環境の要因が複雑にからみ合って発症することがわかってきており、腸内細菌との関係も注目されています。

兵庫医科大学病院 IBDセンターの特徴

1 患者さんの数が国内トップクラスのハイボリュームセンター

兵庫医科大学病院のIBD診療の歴史は1980年代からと古く、長年専門医による診療を行ってきました。IBDセンターは、患者さんの増加に対応するため、2009年に院内に設置されました。近畿地方はもちろん、北海道や沖縄から来る方もいらっしゃるなど、多くの患者さんが日々当センターを受診しています。

2022年の診療実績

内科

○新規患者数	約420
潰瘍性大腸炎	約280
クローン病	約140
○外来通院患者累計	約2,300
潰瘍性大腸炎	約1,300
クローン病	約1,000

外科

○手術数	278
潰瘍性大腸炎関連	126
クローン病関連	152
○手術累計	3,980以上
潰瘍性大腸炎関連	2,210以上
クローン病関連	1,770以上

2 内科・外科ともに 専門医が毎日診療

IBDセンターを設けている病院は全国にありますが、内科・外科の専門医が毎日外来診療を行っているIBDセンターは日本で兵庫医科大学病院だけ。内科と外科だけでなく、看護師や管理栄養士などのスタッフも緊密に連携して、患者さんに対応しています。また、近隣の病院やクリニックともしっかりと連携しています。



3 認定看護師による ストーマ外来を併設

IBDの患者さんの外科治療では、ストーマ（人工肛門）の造設を行うことがあります。当センターはストーマ外来を併設しており、ストーマのケアに関して高い技術と豊富な知識を有する2名の皮膚・排泄ケア認定看護師が患者さんやご家族のご相談に応じています。

IBDの治療は日々進歩しています

炎症性腸疾患の中でも代表的な病気である潰瘍性大腸炎とクローン病については、原因が特定されていないため、まだ根本的な治療がありません。しかし、治療法の進歩は著しく、腸の炎症を抑える薬をはじめ、さまざまな働きをする新しい薬がたくさん出てきています。これらの病気には症状が悪化する活動期と症状が落ち着く寛解（かんかい）期がありますが、内科的治療の選択肢が増えてきたことで、寛解を維持できる患者さんが増え、特に潰瘍性大腸炎では手術が必要なケースは減少傾向にあります。とはいえ、寛解期にあっても再燃を防ぐために治療を継続すること、また、炎症が繰り返されることによって発生するがんなどを早期に発見・治療することも重要です。



IBDセンター センター長 いけうち ひろき 池内 浩基

患者さんのQOLを上げるため 強固な連携体制を築いています

潰瘍性大腸炎とクローン病はいずれも、腸の炎症が繰り返し起こる慢性の病気であり、社会生活を営む上では手術を選択したほうが患者さんのQOL（生活の質）が上がる場合も少なくありません。当センターでは、内科と外科で毎週合同カンファレンスを行って強固な連携体制を築き、一人一人の患者さんの病状や生活環境などを考慮しながら、より豊かな生活を営んでもらうために最適な治療法をご提案しています。地域の病院やクリニックとの連携も非常に重要になるため、年に一度は連携ミーティングを実施して、最新情報の提供などにも努めています。

